

与那国島一周マラソン体験エッセイ

北海道大学スラブ研究センター

共同研究員 舛田佳弘

1. 背景・参加経緯

筆者は本年4月1日から7月7日まで台湾交流記録調査嘱託専門員として与那国町役場に在職し、日本最西端の国境交流活動に携わっていた。その後、カナダのヴィクトリア大学に客員研究員として赴任し、与那国のその後が気になっていたところ、11月9日に与那国島一周マラソンが開催される旨の情報を得たため、与那国に対して北大スラブ研究センターが今後どのように支援を行えるかということと併せてマラソンに出場する運びとなった。同時に JIBSN シャツで参加すれば宣伝効果も見込めるのではとの期待も持っていた。約4か月ぶりの訪問であったが島民は暖かく迎え入れてくれ、前回滞在させていただいた「お食事処 磯」の2階でマラソン当日をはさみ約1週間を過ごした。前回の滞在からよく利用していた「福山スーパー」では「あら、また戻ってきたの?」とやや解釈の難しい挨拶を受け、マラソン出場の目的を伝えたところ、驚くほど歓迎の意を表現いただき、本マラソン大会が島の恒例行事として根付いている様子が感じられた。本大会では10kmと25kmの2コースが設定されており、今回、筆者は島を一周する25kmコースに参加することとなった。もう20年近く以前のことであるが、陸上部長距離パートに所属していた経験からそこそこは走れるのではないかと軽い気持ちで申請したことが誤りの始まりであった…。



大会前日には闘牛大会が実施された。これはカジキ釣り大会や今回のマラソン大会のようなイベントに合わせて実施されており、今回は180回目であった。筆者はスペイン闘牛のようなイメージを持っていたのだが、ここで開催される闘牛は牛同士の首相撲（体重別）。与那国では闘牛の飼育も行われているが、本格的に闘牛としてデビューするのは島外（沖縄以外に岩手や新潟等も）に売り出されてか

ららしく、基本的にデビュー直前の牛を出場させている。曇り時々激しい雨という天候のため、満席の観客というわけではなかったが、マラソン参加者のほか自衛隊員も見に来ていた。



2. マラソン

開会式場および25 kmコーススタート地点となった与那国中学校は島北側の祖納に位置し、小高い丘となっていることから見晴らしのいい場所である。体育館にて受付を済ませた後、会場を見回ったところ想像以上に自衛隊が協力している姿が見られた。確かに事故等有事の対応に加え、簡易トイレや浴室等设备まで有する組織はそうないであろう。昨今の自衛隊誘致に係る敏感な感情が完全な解消を見たとは言い難いが、こうした大規模なイベントにおいて自衛隊ができる貢献は島民にとっても大きな助けとなっていることがうかがわれた。本大会の参加者は過去最高の529人と、初めて500人を超えたことで島内の大会本部の意気込みも高まっていた。

全人口1500人のこの島で数百人に上る参加者を受け入れられるのか疑問に思い、役場で尋ねたところ宿泊施設をフル稼働すれば700人程度まで収容可能との話であった。ただし、筆者自身がそうであったように、スーパー等で簡単に朝食を済ませようとしても品物が売り切れているなど宿泊以外のホスピタリティにも改善の余地は少なくない。夜の飲食場所も十分とは言えず、空席を求めて何件か回る必要があった。

参加者における島民の割合は25 kmコースで1割弱、10 kmコースでは1/3強と大きな隔たりがあった。前回滞在時にもしばしば見かけたが、島民でジョギングを行っている人は少なくなく、今大会への参加者も多いのではないかと予想していたが、一周コースへの参加者は意外と少なかった。後から振り返ればこの時点で自身の勘違いを悟るべきであったのかもしれない。

25 kmコースのスタートは午後一時で、筆者も簡単なストレッチを行った後スタート地点に立った。先述の通り参加者の多くは島外から来ており、被り物や奇抜な服装の参加者もお祭り感覚の中でスタートした。上記コース図では高低差は示されていないが、

スタート地点から東崎まではずっと上りが続き、初っ端から難所となっている。筆者は久しぶりのマラソンということもあってまったくペース配分を理解しておらず、その時点では上位集団並みのスタートをしてしまった。30℃近い気温と強い日差しはそれだけで体力を奪っていき、東崎で島の電力の約三分の一を賄っている風力発電を横目にする頃には既にかかなり息が上がっていたことをまだ自覚していなかった。東崎を過ぎると比川まで10kmほど激しいアップダウンが続き足への負荷が大きくなる。筆者も膝がガクガクになり、選挙の神様ともされる立神岩を過ぎる頃には満足に足が上がらなくなっていた。比川から南牧場を通過して久部良に至る行程は左手に海、右手に牧場という素晴らしく美しい景色が続くが、筆者はもはや「走る」という態をなしておらず、開き直って景色を楽しんでいるふりをしながら「そろそろリタイヤするかな」とも考えつつ歩んでいた。ところが、コース沿道では多くの島民が応援してくれており（後に聞いた話ではそれぞれの職場で応援を推奨していた由）、うち知り合いもかなりいたため、言い出すタイミングを得られないまま西崎を過ぎた。天気は非常に良かったが残念ながら台湾を見ることはかなわず、疲労に加え無念も思いも足を鈍らせていた。北牧場あたりまでの緩やかに続く上り坂では歩いたり走ったりを繰り返し、ダンス浜に打ち寄せる荒波に励まされながら進んでいた。空港近辺の給水地点でまだ4時になっていないことを聞き、タイムリミットである3時間40分には間に合いそうであったため、ようやく完走を決意できた。ゴール地点でもある与那国中学校ではゴール直前にグラウンドを一周することになっていたが、「後二週！」等誤った声援も聞こえ、少々不安を感じながらも何とかゴールすることができた。

結果は3時間20分と元陸上競技部員としては惨憺たるものであったが、JIBSNの宣伝としては完走しただけ多くの人々に見てもらえる機会になったのではないだろうかと自分を慰めた。優勝の村松稔氏は与那国島の昆虫に魅せられて移住してきた青年で、現在は町の教育委員会で勤務している。同氏のタイムは1時間35分と現役陸上選手としても通用する立派な成績であった。こうした特殊な人材を有効に活用することも島にとって大切な課題となろう。閉会式後のセレモニー（ふれあいパーティー）ではカジキの舟盛りがふるまわれ、参加者にはビールが配られていたことと併せて大変な盛り上がりであった。



自衛隊南西航空音楽隊による演奏から伝統芸能（棒踊り、豊年歌劇等）と続き、島唄ライブ（大城謙氏）が始まるころには多くの参加者がステージ前まで詰めかけて一緒に踊る

というはっちゃけぶりであったが、この雰囲気が多くのリピーターを生んでいる要因でもあるようで、筆者自身また参加したいと感じさせられた。

3. 与那国と台湾と

マラソン後の滞在では北大スラブ研究センターの岩下先生を交え、外間守吉・与那国町長と今後の台湾交流について意見交換を行った。筆者からも「台湾交流記録調査嘱託専門員」の制度を一時的なものにせず、継続的に受け入れていただけないかと具申したところ快諾を得ることができた。台湾との交流に関する資料館の設立は記念碑的イベントとなるであろうし、それにとまなう資料整理も重要な業務ではある。ただし、交流とは継続することが最重要課題であり、その橋渡しとなる当該職位も継続される必要があるだろう。これまでは台湾側の日本語話者（主に羅子章・花蓮市顧問）に依存してきたが、日本語教育を受けた世代の高齢化により、今後は与那国側にも専門の担当者が必要となろう。

今回のマラソン大会に台湾からの参加者がほとんどいなかったことは残念である。台湾側への宣伝が足りないということもあろうが、中国語スタッフが足りない等受け入れ側の問題も大きいと思われる。前回のカジキ釣り大会の際、台湾から来島した台湾の高校生が交流会にノリノリで参加していたことを思い出すと、マラソン大会であれ他のイベントであれ、交流会の雰囲気は台湾でも受け入れられると予想される。姉妹都市である花蓮でも太魯閣マラソン¹が人気を博しており、需要は十分に見込めるであろう。開催時期がちょうど11月初めであるため、現状では与那国マラソンと与那国を含む八重山三市町マラソンと連携することも面白いのではなかろうか。また、レベルの高い選手の参加が全体の意欲を刺激する効果も期待できよう。

¹高低差440mに及ぶハードコースでのフルマラソン。上位者には賞金も用意される。